

<VI 展示研究報告(4)>

令和2年度第9回企画展
「教員研究成果展」井上 眞弓^{*1} 松田 正己^{*2}

令和2年度に開催された「教員研究成果展」(会期: 令和3(2021)年2月24日(木) - 4月23日(金))では、教員の専門分野における研究成果を紹介している。

令和2年度教員研究成果展展示報告
大江文庫公開事業と学生の展示学習

－「文化の表と裏展」と「源氏物語の色展」を中心に－
井上 眞弓

はじめに

東京家政学院大学附属図書館(「大学附属図書館」という、以下同。)が保存・管理している大江文庫の存在は、学生にとって身近であるとは言いがたいであろう。まず、蔵本は学生個人が容易に扱える資料ではない。また教員から大江文庫についてアナウンスを受ける機会もあまり多くはない。よしんば「大江文庫」という名称を知っていたとしても、文庫の具体的な内容や沿革についての理解は乏しいのが現状である。しかし、自分たちの学ぶ大学が何を大切に、それを学生に伝えるために(目に見えない物を含めて)何を蓄えてきたのか、こうしたことを知ることを通して学びの幅が広がり、かつ深みが増すこともあるのではないかと。大江文庫は、創立者大江スミ先生に因んで江戸期から昭和30年代までの暮らしに関する資料を蒐集している文庫であるため、ある意味、大学での学びに即応した資料が収集・保管されているといえるものなのである。

稿者は、学生に大学の文化資産のひとつとして大江文庫の存在を周知すること及び学生が大江文庫の利活用を促進する方策を探るべく、平成18(2006)年に開催した「紫式部の歌を探そう展」を皮切りに、大学附属図書館の2階展示スペースにて学生とともに大江文庫公開事業を4年にわたって行ってきた。それは、

大江文庫の展示学習を通して、学生に思考やテーマを形にする難しさと楽しさを味わってもらうとともに、表現する力や伝達能力を伸ばしていけるようにと願った実践であった。実際に展示学習をしたのは、旧人文学部日本文化学科古代文学ゼミ学生である。そして、その展示を学科の専門科目授業内で見学し、文庫の存在自体を学生に知らしめることに努めた。「令和2年度教員研究成果展」では、そうした教育活動のうち、博物館を利用した「文化の表と裏展」と図書館展示「源氏物語の色展」を対象とした。大江文庫公開事業と学生の展示学習の意義を再考することをねらいとして、本展(「令和2年度教員研究成果展」をいう、以下同。)に臨んだ。

本展の概要とコンセプト

本展は、「文化の表と裏展」及び「源氏物語の色展」の2部で構成されている。本稿で言及する「文化の表と裏展」とは、大学附属図書館「大江文庫」公開事業の一環として、平成19(2007)年6月15日から8月26日まで、東京家政学院生活文化博物館(「生活文化博物館」という、以下同。)と大学附属図書館の2会場を使用して実施された特別展の名称である。第一会場である博物館では「付録の文化史」、第2会場の図書館2階展示スペースでは「源氏文化追跡」と題して、それぞれ展示がなされた。当該展は、人文学部日本文化学科、生活文化博物館、大学附属図書館の合同開催であった。往時日本文化学科では、大江文庫蔵本の利活用の提案として、学生が本学院の文化資産から何をどのような方法で学び、かつそこで学んだ知を学生自らがどのような形で発信することができるのか、という命題を企画し、一部の授業でその取り組みがなされていた。そのなかで当該展は、展示の企画やキャプション制作という体験を通して、学生のプレゼンテーシ

^{*1} 井上 眞弓 (いのうえ まゆみ) 令和2年度現代生活学部現代家政学科教授

^{*2} 松田 正己 (まつだ まさみ) 令和2年度人間栄養学部人間栄養学科教授

ョン能力の向上と情報発信のための自発的学習を促すという、教員による学習支援を形にしたものである。

また「源氏物語の色展」は、同じく大江文庫公開事業として平成20(2008)年7月3日から8月3日まで、旧人文学部日本文化学科古代文学ゼミ学生と担当教員井上眞弓の企画により、大学附属図書館2階展示スペースにて実施された展示である。

稿者は平安時代の文学研究を専門としており、本学において日本の古代文学の研究・教育分野を担当した。稿者が専らにするテキストを中心とした解釈や批評については、本学のカリキュラムにしたがった段階的学びが構築されており、それに基づく授業実践が行われたが、さらに幅広い教養を身につけるリベラル・アーツの観点から、学域を越えた学びを学生とともに実践しようと思ったのが、図書館や博物館での展示学習と展示見学である。平成18(2006)年度より平成21(2010)年度まで、学生とともに大江文庫が蔵する書籍や各種資料、および附属図書館に配架されている書籍を用いながら、自分たちの調査で得られた結果を分かりやすくまとめて展示し、かつその内容を学生自らのことばによって他の学生にアナウンスするという授業を「卒業研究指導」あるいは「古代文学演習」「日本文学講読A」授業の一部として展開した。

その後の大学組織改革により発足した現代生活学部現代家政学科では、専門科目「日本の服飾」の授業において、往時の学生が用意した展示品等が教材として使用されるに至る。また共通教育／基礎科目（名称変更があったが、所謂一般教育）の「大江スミ先生を語る」、その後継科目である「東京家政学院大学を学ぶ」の授業担当となり、大学の文化資産という観点からの大江文庫紹介や、大江文庫公開事業にかかわる生活文化博物館の江戸復元料理サンプル制作事業等について、この展示で行った資料の一部も用いながら講義を行った。

「令和2年度教員研究成果展」では、このように旧人文学部日本文化学科の学びが新学部の教育・研究にも資するものであったという点から、教育研究上の成果を軸として展示した。

「文化の表と裏展」の内容と本展との関連

女性書家である居初津奈が書画ともに手がけた手習い本『女百人一首』は、江戸時代に刊行され、往時の女性が手に取って学んだ書物である。香蝶楼國貞の錦絵「栄草当世娘（さかえぐさとうせいむすめ）」を合わせて展示し、江戸時代における女性の学びや教育環境について理解を深めることを意識した。錦絵が女訓物

の書肆和泉屋の宣伝に用いられているさまも見て取れよう。江戸時代の出版文化や広告という消費文化についても学びの糸口となる資料なのではなかろうか。錦絵にも描かれている『女今川』等の書物は女訓物と称され、女性教育の教科書や参考書として江戸時代に数多く出版された。大江文庫はこれらの書物の多くを蒐集・保管しており、往時の展示では、寺子屋で教科書として用いられた居初津奈『女童子教』を含む女訓書を公開した。これらは日本文化学科の授業において、学生が古文書の読み合わせとして用いた教材である。往時の日本文化学科では、複数の教員によって大江文庫蔵本を使用した授業や卒業研究指導が行われていた。

さて、こうした江戸時代に刊行された女性を対象とした版本を手にとってみると、「附(付)」「(つけたり)」と呼ばれる「付録」の記事が多く掲載されていることに気づかれる。例えば『女諸礼躰方七宝伊勢物語（おんなしよれいしつけかたしっぽういせものがたり）』（享保7年版）では、『伊勢物語』が書物になっているのだが、頭書部分には食べ合わせないほうがいい食品名等が記される等、暮らしの知恵をはじめ、女性の教養・嗜み・心得といった様々な文言が見いだせる。また『女節用罌粟囊家宝大成（おんなせつようけしぶくろかほうたいせい）』（享保6年版）は所謂辞書であるが、辞書機能の他、女性特有の病の平癒や出産・子授けを祈願する淡島神社の地図「粟島図」、出家してからの呼び名にはどのようなものがあるのか等、人の一生にかかわる知恵をはじめ、「百人一首」の作者紹介や『源氏物語』の巻名の謂われ等が付載されている。盛り沢山な付録がついたこれらの書物から、江戸時代における学びの形が見えてこよう。また教育という側面ばかりではなく付録という文化現象から江戸時代という時代思潮が見いだせるとともに、近代との相同相違から現代社会の一面も照射されるのではないだろうか。女性の生き方や人権のあり方についてもこうした資料を用いて複合的に学べる可能性を指摘しておきたい。これら展示品は、すべて大江文庫蔵の資料を用いた。

現代でも付録満載の雑誌が販売されており、本体と付録のどちらが主でどちらが従であるのか、判断しがたい出版現象を目にする。こうした風潮に対して現代消費文化のみを対象として解明することはむろん出来ようが、江戸時代と連関させ、この問題を考究することも可能であろう。江戸時代には化粧水の付録として書物が付録となった事例もある。往時の展示では、学生の意見により展示品を選択し、キャプション内容も学生が担当した。また展示品として学習雑誌の多彩な付録や成人対象の雑誌付録、広報媒体という側面を

もつカレンダー等を展示したが、資料を残存していなかったため、本展では現代における付録の文化に関する展示は省いた。

一方図書館2階スペースで行われた「源氏文化追跡展」は、王朝文化のなかで生み出された『源氏物語』が後代の文芸や美術品に多大な影響を与えた作品であるところから、その影響下にある後代の生活様式を「源氏文化」と称し、そのありどころを文芸の世界に尋ねたもので、学生の展示学習成果である。香炉や水差しをはじめとする美術・工芸作品、襲色目をはじめとする服飾文化については、簡便なパネル展示に留め、大江文庫や図書館蔵本を中心に、王朝文化のなかで生み出された目に見えない「物の怪（もののけ）」を主として扱った。物の怪とは、王朝の社会的・文化的状況が生み出した家と家との間に生じた確執、恨みや妬みのはらし処に出来る霊的存在である。展示では、『絵入源氏物語』葵巻に見える六条御息所の生き霊が登場する場面や夕顔巻の物の怪場面、大江文庫所蔵『さごろも』（『源氏物語』以降に成立した平安時代物語）の巻三にみえる男君の夢場面、近代に至っても『源氏物語』理解や解釈に資した大江文庫蔵『湖月抄』の当該部分、その他図書館配架の謡曲作品等を展示した。村上春樹著『海辺のカフカ』にも『源氏物語』の物の怪が引用されており、配架の小説も展示に及んだ。稿者架蔵の漫画『あさきゆめみし』も参考資料として展示し、『源氏物語』解釈の幅の広さにも留意した。源氏文化と言えば物として鑑賞される工芸作品類が多いのだが、こうした目にみえないものを文芸はどのように繋いでいるかを扱い、かつ物の怪の文化的背景について考究していく古代文学の学びを形として留めたわけである。

本展では大江文庫蔵『さごろも』や稿者架蔵の『絵入源氏物語』の当該部分を開頁にて展示した。

また「付録の文化史」と「源氏文化追跡」の2展は、「新しい知との出会いをめざして」という博物館と図書館2館の展示ユニットであった。学内を回遊することで普段の授業ではあまり触れることがない異分野の展示品との出会いを促進するねらいがあった。

「源氏物語の色展」の内容と本展との関連

「源氏物語の色展」は、平成20（2008）年7月3日から8月3日まで、図書館2階の展示スペースで開催された古代文学ゼミ生が中心となっていた展示である。『源氏物語』では光源氏の装束を表現した中に「今様色」という色名が見える。「今様」とは「当代風」という意味であり、所謂流行色を光源氏は着こなして

いるのである。平安時代中期の流行色はどのような色であったのか、「今様色」を着こなすことにどのような意味が込められているのか、物語の解釈を深めるために調査し、その結果をまとめて展示した。こうした作業により展示の前提として『源氏物語』に見える服飾文化について押さえておく必要が生じ、大江文庫蔵の『四季色目』（文政13年版）・『かさねのいろあひ』（寛政11年版）・『うすやう色め』（文政9年版）・『源氏男女装束抄』（享保2年版）等の資料も展示することとした。また『源氏物語』の女君が着用している襲色目については『満佐須計装束抄』等の文献より復元を試み、学生によるパネル制作を展示した。服飾文化は四季の移ろいを反映していることから、草木染めのもととなる植物等のパネル制作や『源氏物語』といえば「紫の物語」ともいわれており、紫を多く用いて制作された江戸時代の『源氏物語』関連の錦絵大江文庫蔵「源氏掃除図」（一陽斎豊國画）展示、日本の伝統色のうち、王朝文化にかかわる色（平安時代に生まれた新色）のパネル展示が行われた。

本展においても襲色目関連の大江文庫蔵本、往時の展示を写真撮影したもの、学生制作のパネルの一部、また学生の調査レポート、展示を用いた授業風景の写真等を選択して展示した。所謂「今様色」は、今でいうところの濃ピンクをさすと『源氏男女装束抄』にある。若い光源氏が着用した目にも鮮やかな装束は、光源氏の意向が踏まえられたおしゃれだっただろう。往時のファッションリーダーが貴公子であったことも物語っているのではないかと。こうした服飾文化を調査することを通して、『源氏物語』本文の理解も深まっていくのである。

展示した大江文庫蔵本のうち、襲色目関連の書物は江戸時代制作のものである。したがって図版には褪色がみられ、彩度や明度の参考にはならないが、王朝の文化が江戸時代まで脈々と受け継がれていたことを証しているだろう。

おわりに

本展は、往時の既展示品のうち、ごく一部を用いて再構成したものである。本展において往時の展示における意図が必ずしも伝達出来たとはいえないが、学生が展示学習を通じてなにがしかを学び、それが大学の文化資産「大江文庫」の利活用であったということは明らかにできたのではないと思われる。今後も本学での学びを意識化できる文化資産を有効に利用し、学生の学びの質を担保するとともに学生の自尊感情を高める教育についてもさらに取り組みを広げていただ

れば幸いである。

往時の展示においては、大学附属図書館の関原暁子氏、関全葵氏、生活文化博物館の川本利恵氏、旧日本文化学科の小瀬康行先生、熊井保先生、西海賢二先生、内田宗一先生をはじめとする諸氏にご協力いただいた。また稿者が行った大江文庫資料を利用した授業実践では、大学附属図書館の小野原朱美氏、宇野真理氏にご協力いただいた。本展に関して、生活文化博物館の川本利恵氏のバックアップに寄るところが大であった。記して謝意を表す。



図1 「文化の表と裏展」より
『女百人一首』『女諸礼儀方伊勢物語』等の展示



図2 「源氏物語の色展」より
『源氏物語湖月抄』『絵入源氏物語』等の展示

令和2年度教員研究成果展展示報告 (「生存科学研究」、千代田学関係、似顔絵)

松田 正己

1. 生存科学研究

2016 年

暴力的な功利主義と社会保障

19世紀英国と今の健康福祉政策をつないで見る

—羊の皮を被ったオオカミ：現代の健康（障害）福祉

関連の「〇〇支援法」—

内容

現代の社会保障の危機の原因を暴力的な功利主義ととらえ、その現代における現われを、健康・福祉領域の「〇〇支援法」を通して考察する。我が国では、障害者自立支援法（2005年制定）、その後名称を変えた障害者総合支援法（2012年制定）に対して当事者や家族たちから反対運動がおきており、さらに国際的に見ても障害者の権利を守ることから逆行した法であることが明確になっているが、それらを押し切って政策を実行していることが暴力的といえる。対して、平和的な功利主義としては保険法・福祉法が上げられ、これは国民に「健康で、文化的な最低限度の生活」を保障する義務を果たすために作られた法である。

暴力的な功利主義とはそもそも何かということを19世紀のイギリスの事例から紐解き、平和的な功利主義に潜む罫も見据えた上で、国際的な動向を原動力にして「〇〇支援法」を暴力的な功利主義から平和的な功利主義へ変えていくことを提案する。

(生存科学、Vol.27-1, 3-17, 2016)

2019 年

世界の健康改善に及ぼす国際環境力の作用

—アルマ・アタ宣言から40年間の意味—

内容

世界における健康状態の改善はめざましく、予防接種率は80%台となっている。これは自然に起きた現象ではなく、世界の人々が協力し合い、助け合ってきた努力の結果であり、いわば国際環境力の成果である。この世界の健康改善に及ぼす国際環境力の作用について、契機となったアルマ・アタ宣言に至る経緯や影響について振り返り、改めて意味を問い直す。

1946年に採択されたWHO憲章に書かれている「健康は人権である」ということを大々的に訴えたのがアルマ・アタ宣言（1978年）である。当時の東西の冷戦（共産主義対資本主義）と南北問題（先進国対開発途上国）を、健康という国際環境力で乗り越えたのがその宣言であった。

各国の政府に十分な健康の国際環境力をもたらすには、財政の問題も大きい、憲法を変えるなどの動きが必要になる。(生存科学、Vol.29-2, 101-113, 2019)

2. 生存科学共同研究

2016 年

高齢者、障害者などの生存に関わるユニバーサル・ヘ

ルス・ケアと福祉・社会保障の研究会

(松田正己, 江口晶子, 大林雅之, 小山修, 菅原スミ, 奥野ひろみ, 太田勝正, 原正一郎, 藤井達也)

内容

この研究会は国際的に増大している高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケア (UHC) の動向を総合的に捉えることを目的とし、多角的な視野から、人類の福祉・社会保障環境など生存科学に関する研究を推進している。その平成 25 ～ 26 年度に開かれた 12 回の研究会の総括。テーマは、子供の権利擁護、虐待、がんの看取り、精神障害者を例とした障害者支援、英国の例から見た看護倫理、災害時における高齢者、障害者のユニバーサル・ヘルス・ケアなどがある。(生存科学、Vol.26-2, 83-110, 2016)

2016 年

ユニバーサル・ヘルス・ケア (UHC) と高齢者、障害者などの生存に関する考察

(松田正己, 江口晶子, 大林雅之, 小山修, 菅原スミ, 奥野ひろみ, 太田勝正, 原正一郎, 藤井達也)

内容

生活科学の視点から、特に高齢者、障害者に焦点を当て、国際的に重要性が増しているユニバーサル・ヘルス・ケア (UHC) についての考察。UHC とは何かという根本的な考え方を検討するとともに、より理解するポイントとして、非常時から日常のケアを考える必要性を提案するにあたり、具体例として東日本大震災の相馬市などの取組から UHC を検討する。さらにタイの UHC と虐待の例を取り上げ、権利としての健康(生存の権利)、尊厳としての健康(尊厳ある生存)について考察する。(生存科学、Vol.27-1, 155-193, 2016)

2018 年

健康福祉領域の未来学について—公衆衛生倫理、障害者の支援対策・人権、憲法・行政法の 3 つの視点から— (松田正己, 増田一世, 岩隈道洋)

内容

健康福祉領域の未来学について公衆衛生倫理、障害者の支援対策・人権、憲法・行政法の 3 つの視点から、それぞれ「未来への責任」、「何をバトンタッチ」、「意識化する」、「未来の設計・実践方法」の項目にそって提示する。(生存科学、Vol.28-2, 31-43, 2018)

2019 年

地域保健における脆弱性と災害時レジリエンス (自然回復力) について

—東日本大震災における青森県の防災対策、保健師のガイドラインの例から—

(松田正己, カニタ・ヌンタポット, 原正一郎, 太田勝正, ピラボン・ブンサワディグルチャイ, ウルスラ・プレイ, 反町吉秀)

内容

地震や津波などの大規模災害や原子力発電所の事故などの科学技術社会への危機感が生じている現状を踏まえ、新しい状況下における実践的な生存科学とはどうあるべきかを、レジリエンス (自然回復力) と言う切り口から考察する。その際、レジリエンスは元々、心理学の「脆弱性」の反対語であることに着目し、「脆弱性」の視点も考慮する。(生存科学、Vol.30-1, 15-35, 2019)

2020 年

バイオポリティックスとしての現代公衆衛生とその歯止めとしての「公衆衛生倫理」

—「生存の理法」の新たな展開を求めて—

(松田正己, 越智小枝, 藤田雅美, 増田一世, 大林雅之, 岩隈道洋, 鈴木千智, 江口晶子)

内容

バイオポリティックス (生政治) とは哲学者による用語で出生・死亡率の統制、公衆衛生、住民の健康への配慮などの形で、生そのものの管理を目指すものと定義されている。「バイオポリティックス」という言葉が生まれた時代背景やエイズの蔓延から一国の公衆衛生の制度を超えたグローバル・ヘルスの課題などを考察することで公衆衛生倫理とバイオポリティックスを結びつけて論じることの意味、それらが「生存の理法」との関係性を提示する。(生存科学、Vol.30-2, 9-29, 2020)

2020 年

公衆衛生分野における「AI 時代における生」を考える—災害保健マニュアルの文献検討とフェーズ設定のビッグデータ、新聞写真タグの活用の可能性—

(松田正己, ウルスラ・プレイ, 江口晶子, 原正一郎, 太田勝正)

内容

東日本大震災の被害が大きかった宮城県、福島県、岩手県、青森県を訪問し、被害の実際を見聞するとともに、東北大学の震災データベースの災害保険分野への活用を試みており、それらデータサイエンスの知見を「AI 時代の生」に結びつけ、生存科学の視点から公衆衛生分野における「AI 時代の生」の現状、今後

の可能性と将来への展望、リスクなどを、地域で公衆衛生活動に従事する保健師（公衆衛生看護）の災害保険マニュアルにより考察する。
(生存科学、Vol.34-1, 25-49, 2020)

3. 平成26年度千代田学

千代田区の現代都市生活における「生活の質」向上と、社会文化特性に関する研究

一東京家政学院大学一

研究内容・結果

ビクトリア朝の影響（ビクトリアン・インパクト）は19世紀から20世紀初頭にかけての岩倉使節団の影響が強く、インパクトとしては、広く、政治、経済、文学、服装、建物、食事、お茶の習慣、軍事（例 区内の東郷公園）にも及ぶ。セルフ・ヘルプ（自助論、スマイルズ、1859年）が与えた影響は、現代の新自由主義や社会保障論にも関係している。そこで、19世紀英国の新救貧法と公衆衛生法に見る功利主義の二面性から、現代の日本の支援法を検討することになった。具体的には、女性の健康包括支援法と障害者総合（自立）支援法の法規側面を加え、公衆衛生学、社会福祉学から検討した。

(11月15日) CES 環境フェスタでの報告

千代田区の現代都市生活における「生活の質」向上と、社会文化特性に関する研究（千代田ビクトリアン・「生活の質」プロジェクト）- 環境に注目して -

(11月23日) 第18回日本健康福祉政策学会学術大会での報告

ポスター

松田正己、酒井治子、西口守、岩隈道洋 「我が国の支援法のルーツに関する考察 - 19世紀英国の新救貧法と公衆衛生法に見る功利主義の二面性から -」

ワークショップ

松田正己、増田一世、岩隈道洋 「支援法を考える - 女性の健康包括支援法と障害者総合（自立）支援法 -」

(3月7日) 現代都市生活の質・公開研究会

講演

「公衆衛生の歴史から見た「現代都市生活の質」

松田正己「千代田区のライフ・スタイルとビクトリアン・ヘルス・インパクト - 19世紀英国の公衆衛生法と新救貧法、功利主義の二面性 -」

小山修「子育て支援のための地域活動 - これまでとこれから -」

シンポジウム「19世紀英国の公衆衛生・社会保障政

策と今を「支援法」で紡ぐ」

増田一代「障害者制度改革は今」

芦野由利子『リプロの視点から「女性健康支援法案」を考える』

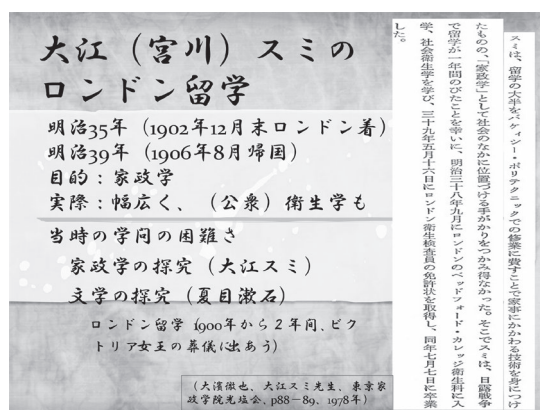
岩隈道洋『「支援法」を巡る法的視点』

(3月14日) 現代生活学セミナー

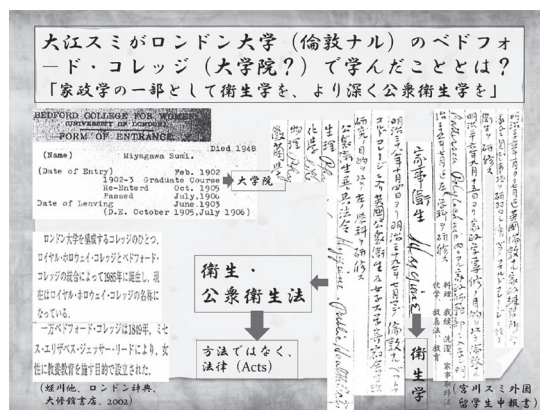
松田正己「現代生活学と大江スミ先生の関わりについて」

(スライド1 - 4)

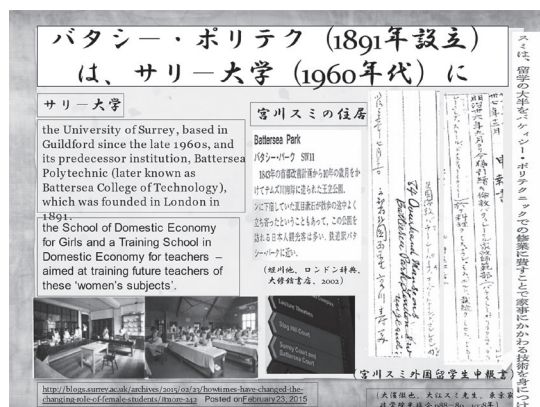
(3月28日) 大妻さくらフェスティバル2015での報告



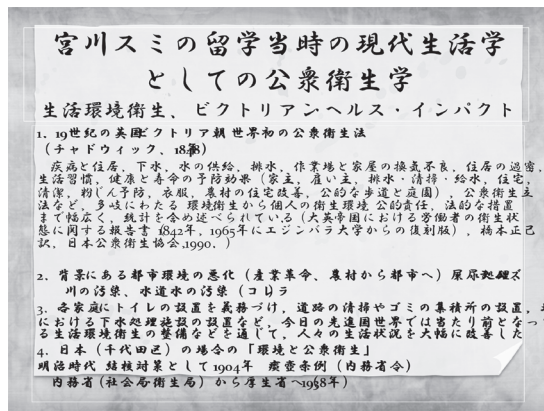
スライド1



スライド2



スライド3



スライド4



写真2

4. 「アートと公衆衛生」、学生の似顔絵

学生には、2年生の公衆衛生学実習で、公衆衛生と「人生プラン」というのを描かせてきました。自分の人生の、今から死ぬまでを8枚くらいの絵にして、ライフイベントに、どのような公衆衛生が関係するかを考えるためです。

このテーマはアートと公衆衛生です。公衆衛生は、学生にとっては、法や制度、統計など、とっつきにくい内容なので、わかりやすくするため、実は、映画や小説、音楽のなかにも出てくるということを示しています。（映画と公衆衛生については、冬休みの宿題に、レポートを出してもらっています）「村上春樹の小説のテーマと公衆衛生」という論文もまとめました。

また、その代わりに学生の似顔絵を、2年前から卒業記念にプレゼントとしています。

2015 - 18年の担任のクラス40名（写真1、2）、2019年のゼミ生8名（写真3）、2020年のゼミ生8名（写真4）。



写真3



写真4



写真1